
若竹の

真咲 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若竹の

【Nコード】

N8444Z

【作者名】

真咲 楓

【あらすじ】

おてんば貴族の竹姫は、武士の息子・鬼武丸が大好き。身分の違いを説く鬼武丸も何のその、足繁く通っては遊んでもらう毎日だった。

そんな日がずっとずっと続くのだと信じていた。少なくとも、彼女が嫁ぐその時まででは。

けれど、裳着を迎えた彼女を待っていたのは……。

前にしへの

時は平安、まだまだ貴族の時代だった頃。
京の外れをばたばたと走る女童がいた。

振り分け髪はとても艶やかで、黒目がちの瞳はぱっちり大きい。
誰が見ても非常に可愛らしいと評されるだろう彼女が向かったのは、
さして大きくもない邸。
慣れた様子で門番に挨拶をして中に入ると、少女は迷いなくすたす
たと歩いていく。

「鬼武え、遊ぼ！」

簀子に手をかけて勾欄の間から顔を覗かせ、喜々として呼びかける。
その視線の先で、何やら書物を読んでいた少年が、静かにそれを置
いて振り向いた。

「……竹姫。私の名前は鬼武じゃなくて、鬼武丸なんだけれど。い
つになったら正しく呼べるの？」

ほんの少し眉根を寄せた少年は、今年で十一歳。竹姫よりも一つ年
上だ。

「いいじゃない、鬼武の方が。あたし好きよ、鬼武って名前。いか

にも武士らしくて」

「そういう問題じゃなくて……」

けろりと返した竹姫に、鬼武丸は疲れたような声を出す。きやらきやらと笑った竹姫は、ね、遊ばともう一度催促した。ため息を一つ落としてすいと立ち上がり、鬼武丸は彼女に歩み寄ると再び腰を落とす。

「竹姫。仮にも貴族の御息女が、このような武士の家に来ちゃいけない。いつもそう言っているだろう？」

「ええ。そして最後にはいつも、遊んでくれるのよね」

全く動じずになにっこりと笑った竹姫は、それはそれは愛らしくて。どうやら今日も、海よりも深いため息をついた鬼武丸の負け。

ひょいと勾欄を飛び越えると、その外側のほんの狭い場所に立つ。片手で勾欄をつかみながら、彼は竹姫に手を差し伸べた。

「ほら、つかまって」

預けられた小さな手をしっかりと握って、細いながらも筋肉のついた腕に力をこめる。引っ張り上げた彼女の手を離して素早く腰に回し、しっかりと支えた。

「やっぱり鬼武ってすごいわ。どこにこんな力があるの？」

無邪気に喜ぶ竹姫に、鬼武丸は形の良い唇をほころばせて苦笑する。

「そりゃ、歌や手習いの練習だけしていればいい貴族の御子息方とは違って、私は武士の子だからね。鍛錬も積むさ。でも、お願いだから早く中に入ってくれないかな？この体勢、結構つらいんだけど……」

ほぼ片手だけで二人分の体重を支えるのは、鍛えているとはいえきついものがある。

慌てた竹姫が勾欄によじ登ったのを確認すると、彼も再び身軽に飛び越えた。危なっかしく乗り越えようとしている彼女を支えて腰掛けるような体勢にさせると、その小さな足から草履を脱がせて簀子に伏せる。

腰を支えて抱き下ろすと、竹姫はまっしぐらに彼の部屋に入っていた。文机の上に置かれた書物を見て、大きな目がさらに大きく広がった。

「兵法の本、かな？すごい、難しいの読んでるのね」

「私もあと数年で元服だから。そろそろこういうことも始めないとね」

「ふっん」

面白くなさそうにうなずいた竹姫は、本人に了解も取らずにそれを片付けてしまう。代わりに隅の方にあつた碁盤を持ってこようとしているが、力が足りずに引きずるような形になってしまっていた。苦笑した鬼武丸が彼女から碁盤を受け取り、軽々と持ち上げて縁側にほど近い場所に据える。

「またこれ？いつも途中で機嫌が悪くなるくせに」
「いいの！」

飽きないなあと笑う鬼武丸に、竹姫がむきになって口答えをした。

「今日こそ負けないんだから！」
「はいはい」

二人で向かい合わせに座り、しばらく静かな時間が流れる。ぱちりぱちりと碁石を打つ音だけが響いていたが、さほども経たないうちに怒ったような声で破られた。

「ああああっ、もう！やめたー！」
「また竹姫のわがママが出た」

からかう響きを含んだ鬼武丸の言葉に、彼女は頬を膨らませて横を向く。

「だって負けるんだもの」

「手を抜いたって怒るくせに」

「だって、馬鹿にされてるみたいじゃない!」

じやらりと石を崩して片付け始めてしまう竹姫に、鬼武丸も諦めてそれを手伝った。

「何をする？蹴鞠？貝合わせ？」

「貝合わせ!」

喜色を浮かべた彼女にうなずき、碁盤を持って立ち上がる。

「待ってて。母上からお借りしてくるよ」

「行つてらっしゃい」

元気な声に送られて、彼は裾をさばいて歩き出した。

中 しづのをだまき

貝合わせに興じながら、竹姫が不意に目を輝かせて首を傾げた。

「ねえ、鬼武。鬼武の父御は、この間の戦で勝ったのよね？」

「うん」

「すごい！素敵だわ……」

うつとりと息をつく姫に、鬼武丸はふと顔を曇らせる。

「竹姫、戦はそんなに格好いいものじゃないよ。血なまぐさいし、雄叫びや絶叫で満ちていると聞く。負けた敵の将は、首を落とされる」

7

生と死が常に紙一重なのだと聞かされて初めて、幼い顔からすうと血の気が引いた。

「鬼武も……そこに、行くの？」

「いずれはね。私も武士の子だから」

平然と答えた鬼武丸に、竹姫は身を乗り出して彼の袖をつかむ。足下で貝が蹴散らかされた。

「嫌よ！そんな怖いところ、行っちゃ嫌！死んじゃうかもしれないし、もし生きてても、負けちゃったら殺されちゃうんでしょ！？」

必死の表情で無茶なことを言う竹姫の手をばんばん叩いて放させ、彼は安心させるために微笑む。

「私は武士だから。命よりも大事なものがあるんだよ」

彼女の表情から察するに、全く安心させることはできなかったようだ。

「武士武士って、鬼武いっつもそればかり」

ぽつりと呟いた竹姫は、とても寂しそう。

「私は兄上を支えて、源氏の庶子として一族に尽くすのが夢なんだ」

艶やかな髪をなでてあやしながら、鬼武丸はひどく優しい声でそう漏らす。

「姫はいずれ、しかるべき貴族の君に嫁ぐんだろ？もう遠いこと

じゃないんだから、いつまでもわがママを言っではいけないよ」

「平気なもの。わがママを許してくれる殿方のところに嫁ぐから」

つんとそっぽをむいた竹姫にかぶりを振り、彼は静かに告げた。

「竹姫。残念だけど、姫は自分の夫を選べないんだよ」

「そんなことわかってるわ。でも、お父様はあたしに甘いもの。一生懸命お願いすれば、きっと聞いてくださるわ」

「それでも叶わなかったら？」

「うーん……鬼武のところに逃げてきて、お嫁さんにしてもらおうかしら。駆け込み寺に行つて尼になるのもいいかもしれないわね」

悪戯っぽく言つた竹姫に、鬼武丸も破顔する。

「それはおもしろいね。でも、私のところに駆け込まれるのは少し困るかな」

「あら、どうして？」

「貴族に睨まれたら、仕事がやりづらくなる」

「ひどい！」

怒ったふりをして手を振り上げる竹姫を、鬼武丸が笑いながら避けた。

「冗談だよ」

「もう……」

むくれた彼女の機嫌を直すのに、鬼武丸はずいぶんと苦労したのだとか。

そうこうしているうちに、ずいぶんと時間が経ったようだ。日もずいぶん傾き、空が赤く染まっている。

「もう帰る時間だよ。送っていくから準備をして」

「えー……？まだいいでしょ？」

甘えた声をあげる竹姫の頭をごく軽くはたいて、鬼武丸はきっぱりとかぶりを振る。

「駄目だ。鬼に会いたいっていうのなら、話は別だけどね」

鬼と聞いて竹姫の顔が強張った。

昼は人のための時間、夜は鬼のためのそれ。ぱったり出くわしてばかり食べられても文句は言えないのだから、彼女のみならず、大の男でも夜中の外出は恐ろしいものなのだ。

「どうする？うっかりあははの辻に行っちゃって、百鬼夜行に出くわしたら」

かの有名なあははの辻では、百鬼夜行の度に、妖どもが「あはははは、あーははははははは！」と笑いながら通るそう。出くわして鬼に姿を見られた者は死ぬらしい。

「嫌っ、帰るっ！！」

真顔で脅す鬼武丸に、涙目で即答する竹姫。次の瞬間、明るい笑い声が弾けた。

「あははは、嘘だよ！考えてごらん、竹姫の邸に行くのに、あははの辻を通りやしないじゃないか。よほど方向音痴だけだよ、そんなのは」

からかわれたと知って、竹姫の顔が真っ赤になった。とても楽しそうに笑っている鬼武丸の腕を力一杯叩く。

「鬼武の馬鹿！」

くるりときびすを返して出て行こうとする彼女の背中に、鬼武丸の声が飛んだ。

「鬼はそこらじゅうにいるからね。あははの辻じゃなくても、出くわすかもしれないよ」

ぴたりと動きを止めた竹姫に微笑みながら、鬼武丸は裾をさばいて立ち上がる。ぐると遠くを回って階から庭に下りると、姫の真正面まで歩いていった。

「ほら、おいで」

広げられたその腕の中に向かって、ていっ**と**ばかりに竹姫が飛び降りる。当たり前のように受け止めた彼が草履の上に下ろし、竹姫の支度が終わるのを待って歩き出した。

夕日に長く、並んだ影が二つ伸びる。

後　くりかへし

季節が三度巡り、いよいよ竹姫も裳着を迎えることになった。儀式の数週間前から準備に追われて外に出られなかったため、彼女は鬼武丸に来てくれないかと何度も手紙を送っていた。

返事は、一向に來なかつた。

どうしたのかと女房達に訊いても、一樣に曖昧な言葉が返ってくるばかり。釈然としない思いと一抹の寂しさを抱えて裳着に臨んだ竹姫は、その最中も鬼武丸の姿を探して人々の間に視線を走らせる。けれど、とうとう彼の姿を見つけることはできなかった。

「何で……鬼武、来てくれなかつたんだろ……」

しょんぼりとうなだれる彼女に乳母兄弟が近寄つて、そつと一通の文を手渡す。添えられた花は無残にしおれ、すでに元の色を留めていなかった。

けれど、彼女には親しんだ花だった。

鬼武丸の母君が、好んで植えさせていた　。

「紫苑……？」

「申し訳ありません!!」

勢いよく平伏した乳母兄弟が、震える声を絞り出す。

「十日ほど前に、お預かりいたしました。装着が終わるまではお渡しするなど……！」

嫌な予感がした。

姿を見せない鬼武丸、ちょうど咲き頃を迎えている紫苑。

小さく震える手を抑えながら文を広げた瞬間、竹姫は大きく目を見開いた。

若竹の 伸びゆくさまを 見るほどに 見果てましかば
身こそ憂しけれ

切ないほどの思いが込められた、生まれて初めて受け取った恋文。
この見覚えのある筆跡は。

「鬼武？」

ぽつりと呟いた言葉は、ぽとりと紙の上に落ちた。

「そんな、鬼武　どこ行つたの？」

ふらふらと視線をただよわせ、無意識に立ち上がる。歩き出そうとした袖を、乳母兄弟がつかんで抑えた。

「姫様、なりません！」

「ねえ、藤。鬼武はどこに行つたの……？」

今頃知つた、彼の思慕。今更伝えられて、どうしろというのか。気づいてしまった想いは、どうしたらいいというのか。

「申し訳ございません……………」

泣きながら平伏する彼女に、竹姫もまた、涙をぬぐおうともせずに関かけた。

「ねえ、教えて。鬼武はどこ　？」

彼の父が平氏に敗れ、長兄・次兄と共に処刑されたために、彼が嫡男になったこと。幼いが故に命拾いをしたものの、遠く伊豆に流刑

になったことを彼女が知ったのは、それから数年後のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444z/>

若竹の

2011年12月26日22時52分発行